



全国の友だち・父母を結ぶ
アルプス子ども会機関紙

〒399-4321 長野県駒ヶ根市東伊那
Tel.0265-82-4414 Fax.0265-83-8792



保護者版

No.137

16/03/01



冷たくてもへっちら

寒中子ども会



だより

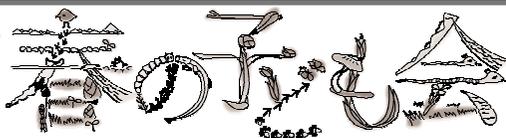
2月最初の週末に、恒例の「寒中子ども会」を開催しました。気温はいつもより少し高めでも、連日、信州ならではの冷え込みで、冰雪行事を順調に行うことができました。夏冬などに比べて限られた時間ですが、ふだんできないあそびに、みんな大いに盛り上がりました。

盛りだくさんの行事の中でも、最もユニークなのが、昨年へ続き二回めの実施となる“ヤカーリング”です。大阪の商店街で生まれたという、なんと「やかん」を使ったカーリング。本家では

商店街のアーケード内で、重しを入れたやかんを用いて行いますが、「寒中子ども会」では、低温を生かした天然のリンクの上で、水を入れて凍らせたやかんをストーンの代わりとして氷上を滑らせます。

冬季オリンピックの競技種目として知っている子はいるものの、大半は初挑戦というカーリングです。最初は、やかんストーンを押し出す力も、弱すぎたり強すぎたりとなかなかうまくいかずに苦戦しましたが、練習を重ねるうちに徐々に上達。

'16



参加者募集中

3/1(火)以降は二次募集となります

午後の班対抗トーナメントでは、白熱した試合が繰り広げられました。ご存じの通り、カーリングは頭脳のゲームでもあります。どのラインでやかんストーンを滑らせるのか、各チームで工夫をこらしていました。自然のリンクのため、少しのここぼこをどう利用するかも作戦の一つです。「そこはポコッとしてるからここを狙おう」などと、眼差しは真剣そのもの。的に見事入ると、全員で大喜びする声が広場に響きました。

このところ降雪がなく、少ないものの雪が積もる山に入り、ハイキングにも出かけました。長靴やスノーブーツを履き、そりと水筒を手に、いつもと違う森の風景が目には新鮮です。シカやウサギの足跡や動物の糞など、動物たちの生きるあかしを発見した子どもたちもいました。

雪不足でいつものような雪あそびを行うことはできませんでしたが、木々の間をターンしながら駆け抜けるそりあそびをするなど、冬の伊那谷の自然をたっぷりと体感できたようです。

最終日は、岡谷市にある「やまびこスケートの森」に出かけ、屋外スケートを楽しみました。大会が開かれるため本格的に整備された一周400メートルの国際リンクは、木々に囲まれたすてきな雰囲気です。初めてスケートをやる子が何人かいましたが、何回も滑ったことのある経験者がスケート靴の履き方や紐を結ぶことから、やさしく

♪ ♯ ♪ ♪ ♪ ♭ ♪

新人中高生リーダー候補 研修と面談を実施

今夏デビューを目指す新人中高生リーダー候補者の研修と面談を、12月に大阪・名古屋・東京の三会場で行いました。全国各地(中には遠く長崎からの参加者も)から集まった応募者たちは、リーダーとしての心構えを学び、レクリエーションの実習、自己紹介の練習を行いました。

教えてくれました。なかなかうまく立てずに座り込んでいる子がいれば、後ろからさっと近づいて、手を差し延べていたのも印象的でした。広いリンクはほぼ貸切り状態だったので、リレー、おにごっこ、またくぐり、列車ごっこ、サッカー選手のような膝滑り、人魚のジェスチャーをしながら滑る、踊りながら滑る、後ろ向き、回るなどなど、いろいろなあそびが次々と生み出されました。

仲間の力の成せる業か、午後には全員すいすい滑れるほど上達し、スピードに乗って滑る心地良さを味わっていました。

「寒中子ども会」では、「なにそれポイント」という謎の言葉がたびたび聞かれました。実は、「なにそれ?!」と思うようなことがあったら、1ポイントとし、班で何ポイント見つけられたかを競っていたのです。自然の中にできた氷の形や、凍った時にできた模様、氷の中に閉じ込められたものたち……見つけては、みんな「見て見て!」と人を集めて自慢し合っていました。それらの模様や形に対して、変な形だねと終わらせてしまわずに、「鹿の形に見える、反対から見ると恐竜の骨みたいだ」「どうしてこんな形になったんだろう」と想像を膨らませて会話が弾みます。

金曜日の夜、バス車中のレクリエーションから土日をとことん遊び尽くしたので、帰路の特急列車の中では多くの子が「爆睡」状態でした。

踊りの実習では、少人数で踊りを教え合うためのチーム分けを彼ら自身に任せました。けれど、なかなかチーム分けが進みません。近くの人と話しているばかりで、なかなか全体への「早く練習しよう、時間があったくないよ」の一言が出てこないのです。なんとか少人数のグループに分かれ、踊りの練習を始めてからはさすがリーダー候補生。「もっと大きく踊ろうよ」「ここの振りがよく分からないから教えて欲しい」と声をかけ合いながら練習し、その後も変化が感じられました。

研修後の面談では、リーダーへの志望動機を改めて聞いたり、リーダー活動と日常生活(学校や習い事、部活動)などの両立について相談をしたりしました。また、今日の自分の様子を思い出し、できたこと、できなかったこと、その理由についても掘り下げて話し合いました。「何もできなかった」と落ち込む参加者に、一緒に面談をし

♪ ♯ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

重症障害児者向けに 国立病院でうた・ゲーム



1月2日に山梨県の国立甲府病院で、アルプス子ども会のリーダーたちが、ボランティアのレクリエーションリーダーを務めました。リーダーOGの一人が同病院に勤める縁で、正月のお楽しみとして、子どもから大人までの入所者約120名とうた・ゲームで楽しい時間を過ごして来たのです。

今回訪問したのは重症心身障害病棟で、重度の知的障害及び肢体不自由が重複した、障害者の中でも最も重い障害のある児・者のための施設です。この病棟を生活の場所として、さまざまな年齢の方々が暮らしているため、入院ではなく入所とされています。

「いつものアルプスの歌とゲームと一緒に楽しむ雰囲気」というのが、当会に40年前の第2回から子どもとして参加した“激レア”OG・片桐有佳さんからの注文でした。リーダーたちにとっても全く初めての体験。勝ち負けやルールを理解し

ていた他の候補生が「そんなことないよ。歌で大きな声が出ていたし、集団ゲームでも活躍していたよ」とアドバイスをする姿も。

これから長いリーダー活動を共に過ごす仲間との関わりの始まりも感じる面談でした。4月に開く「第36回春の学校」への参加に向けて、現在は課題レポートに奮闘してもらっています。

たり、動き回って遊んだりすることは困難な人が対象です。「いつものアルプス」……。不安はありながらも、楽しいメロディーとスキンシップがとれるようなレクリエーションを準備して、当日を迎えました。

当日は病棟毎に廊下の広い場所に集まってもらい、車イスの人、ずりばいながら自分で移動できる人、ベッドで寝たままの人、年齢もバラバラで、いろんな方が参加くださいました。ギターを弾いて歌い始めたら、不思議と「いつものアルプス」の雰囲気。会に参加する子どもたちと違って分かりやすく笑顔を見せたり問いかけに応えたり、ということは少ないですが、わずかな表情の変化や体の動きは確かに感じられます。ふだんの子ども会と同じように、反応を敏感にキャッチし工夫することや、その場にいる誰もが楽しめるように力を尽くすことに、変わりはないのです。

最後は、「ドカボコバナナ」で病院を揺らし(?)終了しました。またぜひ、このような機会を持ちたいと考えています。



「冬の子ども会」アンケートより

参加者アンケート回答から、「春の子ども会」案内書に掲載しきれなかった分を抜粋して紹介します。ご苦言、ご要望も少なからずいただいていますので、しっかりと受け止めて今後に生かしてまいります。お寄せくださった皆様、ありがとうございました。

✍️初めてのスキーは「アルプスで…!」と決めていたので、3年生になるのを楽しみにしていました。スキー用具を見せた事もないまま送り出してしまい、子どもにもアルプスの皆さんにもまかせきりにしてしまいごめんなさいと思っていました。子どもは楽しく帰ってきました。あまりたくさんおしゃべりをしない子ですが、色々楽しかったことを話してくれます。【1組 前嶋さん/3年】

✍️雪が少なくコースが少なかったのは残念だったようですが「めっちゃ楽しかった～」としみじみ言っていました。楽しくて興奮していたというよりも、むしろいつもよりも落ち着いて一日二日は余韻にひたっているようでした(もちろん疲れもあったようでしたが)。学校とは違う色々な境遇の友だちとの出会いを楽しむことができ、親の方もまた今まで見たことのない子どもの一面を発見することができ、貴重な体験となりました。【1組 奥田さん/3年】

✍️アルプス子ども会は今回4回目の参加でした。とはいえまだまだ保育園児。4泊5日は長かったかな。途中で心が折れて泣いてないかな、といういろいろ心配していましたが、バスから降りてきた時の表情で全てがわかりました(笑)。本当に参加するたびにたくましくなって帰って来てくれます。保育園があまりなじめず苦労したのがウソかのようにお兄ちゃんお姉ちゃんにまじって楽しかった話をたくさんたくさん聞かせてくれました。

この経験は彼にとって財産になってくれると思います。

【A組 麻生さん/年長】

✍️初めて食べた焼きりんごがとてもおいしかったようで、宿題の日記には真っ先にそのことを書いていました。ぶどうというあだ名のお友だちがマシュマロを持ってきてくれて、そのマシュマロを焼いて食べたことや、男の子が黒こげになったマシュマロを食べていたことなど、その場に一緒にいたように様子がわかり、楽しく参加できてよかったなと思いました。ジャンボカルタ作りでは、“け”を担当したようで、「学校のお話を作ったけどないしょ!!」と言っていました。

【A組 鈴木さん/2年】

✍️終わってからすぐ帰宅するまで元気に様子を話すというよりは疲れてぐったりという感じでした。その後ゆっくり休んだあとは楽しそうにお友達の名前を出して覚えてきた関西弁で話をしてくれました。スケジュールがもりだくさんで親から見ると楽しそう!と思うのですが、子どもからするといろいろやらなくちゃいけないことが多くて大変だったのかなと思いました。班でのグループ活動についていけない場合、のんびりすごすコースもあるといいと思います。

【A組 勘坂さん/年長】

✍️5日間を終えて名古屋駅で見せてくれた顔は子どもながら精悍さを感じました。普段と違う環境、行動をがんばってきたのだなあと思い、ありがたいことです。8歳の誕生日をたくさんの方々の中で迎えられたことは貴重だったと思います。母親の私にとっても子どもと離れる数日間はいつにもない時となります。目の前にいると些細なことにも怒ってしまいがちですが、そうでないと、子どもの存在がただただありがたく、愛おしく、落ち着くことができました。【A組 松本さん/2年】

♪弟との参加でしたが、班は離されると知り、不安がっていました。あまり元気なノリが得意ではなく、歌についていってない姿、そしてバスに乗り込む前の小さなため息を聞いて、大丈夫かなという心配が膨らみつづける4泊5日でした。帰って来た第一声は「楽しかったー!次はスキーに一人でも参加したい!」でした。友だちもできて、元々自然や田舎で遊ぶのが大好きな子なので、存分に遊べてあっという間の4泊5日だったみたいです。 【B組 嵯峨山さん/3年】

♪夏に初めて参加したときは、行きのバスに乗るのを嫌がって最後まで拒否してリーダーさんの説得でやっと乗り込めました。それが今回の冬では、自分から乗車する子どもの列に並んでさっさとバスに乗り見送りの母が驚きました。帰宅後は家の車に乗るとすぐに手拍子とともに歌を歌っています。本人はあまりおしゃべりできないのですが、よっぽど楽しかったのかなと思っています。 【B組 石田さん/2年】

♪一昨年の夏(年中の夏)から参加し、毎回いろんな思いを抱えて一回り大きくなって帰って来ている印象です。今回は沢山のできごとを言葉で沢山表現して教えてくれました。アンケートも親には「内緒」とかくしながら自分なりの表現で記載していました。保育園での遊びは全てお膳立てされている中での活動が主ですが、子ども会のキャンプでは「みんなで考え成し遂げる経験」ができ、子どもを成長させてくれているように感じています。 【B組 高庄さん/年長】

♪学校の長期休みになるたびに、キャンプを楽しみにしていました。小さかった小学生の時に参加して、今回は中3で、最後のキャンプになってしまい、親子共々残念です。今回も、みなさんに支援していただき、「楽しかった」と言って帰って来ました。学校の冬休みの楽しかったことでも“キャンプ”と答えていたそうです。(中略)これからも、子ども達に、アルプス子ども会のキャ

ンプでしか体験できない事をたくさんやって欲しいです。

【D組 伊藤さん/中3】

♪アルプスから帰って来た娘に「楽しかった?」と聞いたら初めて「つまんなかった」と返ってきておどろきました。よく聞いてみると班に障害のあるお子さんがいたとのこと。そのため計画通りに物事が進まなかったり、待ち時間があつたりということが不満だったようです。しかし一通り不満を言ったらその後は楽しかった話がたくさん出てきました。「つまんなかったならもうアルプスには行かない?」と聞いたら「もちろん行くよ!」と即答。結局はいつも通り楽しいアルプスだったようです。

【N組 井口さん/6年】

♪母親的に一番心配だったことは現地の気温と服装でした。私を含めて冬を横浜以外で過ごしたことがない上暑がりの子なのと暖冬ということで持たせる服に悩みましたが、HPの去年の写真に写っている子の服装を参考に決めました。夏の子ども会(初)参加後から色んなことに自信を持って積極的に活動するようになりました。

【N組 羽田さん/3年】

♪仕事で、学生や社会人1年目の若い子達に接することがあり、「相手の立場に立って考えること」が、少し苦手な子が多い気がしています。イメージする力や自分で考える力が、育つように、たくさんの経験を子どものうちにつんでもらいたいと思います。いつかリーダーさん達のように、自分も周りも楽しくできる子になってくれるといいなと感じています。【S3組 関口さん/5年】



南アルプス・仙丈ヶ岳

エラー防止の原点は「人は誰でも間違える」 綾崎幸生

この冬、期間中にエラーを二件発生させてしまいました。どちらも、大事に至ることはありませんでしたが、本来あってはならない思い込みや不履行からきたものです。事故防止に限らず、行事の質の確保や事務作業でも起きるエラーについて、どのような考え方で再発防止に努めていくかを述べます。



1999年に米国医学研究所が「TO ERR IS HUMAN」（人は誰でも間違える）を発表して反響を呼び、翌年に出た邦訳本が日本でも多く読まれました。いくら間違えるなどと言っても間違いが起きることを共通認識とし、それを原点に据える必要性が明らかにされたのです。

100回に一度エラーが生じる安全策を三重に設けて実行したところで、単純計算で100万回に一度は穴が空く訳です。それが致命的なものであれば、取り返しがつきません。そこでミスをした人を責め立てた所で、何が得られるでしょう。それだけでなく自らの失敗は矮小化報告されがちなのに、問い詰められればなお真相は語られにくくなります。そして、事実の解明と有効な再発防止策が遠のくのです。

古くから航空事故調査委員会（現在の運輸安全委員会）でも、設置の目的を責任の追及ではなく、原因の解明および同様事故の再発防止と決めました。個人の過ちは組織・制度の不備から生まれることは近年常識となり、軽井沢スキーバス事故で報道される、過失の背景を究明する動きには社会進歩を実感します。

とは言え、公益性の低い私的な場面では、まだまだエラーが個人の責任に帰されやすいでしょう。「少なくともこの作業では俺は間違え

ない」と言い切れる人が、他者のミスの繰り返しに怒るのは、「間違える人がある」という前提への対処が不十分だからです。

県下最大で高度医療を担う国立大学病院で立て続けに起きた手術後死亡事故でも、その改革委が出した報告書には、組織形態やヒエラルキーの問題と別に医師個人の技量不足を問うたうえ、今後はより能力の高いスタッフを採用することで質の向上を図るとあります。事故を起こした医師は辞め(させられ?)たようですが、どこかでまた働く(一人の育成に税金が1億円かかるそうですから簡単に転職されては困ります)し、どの病院でも能力の高い人は欲しいでしょう。自院のことしか考えていないようで、これでは抜本的な改革は難しいと思われま

す。医療界では近年、過ちを犯した職員を被害者に続くSecond Victim=第二の犠牲者と捉える考えが示されました。自らのミスで患者を死なせてしまった従事者も、遺族同様に深く傷つく実態があり、本当は再発防止に力を発揮すべき彼らの再起プログラムが模索されています。

子ども会でも、行事運営や班活動において失敗がままあります。長い年月の間には、責任を感じて辞めてしまうリーダーも少なからずいました。しかし、それは大きな損失でした。

そこで彼らがなぜミスしたのか、受けた研修の内容を吟味したり、エラーを未然に防ぐためには周囲のどんな支援が必要だったのかを検証したりして、失敗を繰り返さないことが全体の利益です。支えられたリーダーは甘えずに誰かを支えようと利他的に動くようになり、また、失敗を告白しやすい信頼関係が築かれるなどの好循環をもたらします。(でこびん=会代表)